

キーコンピテンシーを高める単元構想の在り方

矢出 大介

私のこれまでの総合的な学習の時間（※総合とする）の実践では、子どもが課題に向かって探究し、その学びの過程において、出会い、体験を大切に行ってきた。その中で、子どもの意欲は高まっていることを実感できたが、子どもがどのようなキーコンピテンシーを身に付けているのかが不明確であった。今年度は、公益財団法人日立財団と連携して、資質・能力の育成、発揮するトレーニングプログラム、それを応用した探究的な学びを通してキーコンピテンシーを高めることができたかどうかを検証した。

キーワード：キーコンピテンシー、資質・能力、学びの深まり、公益法人財団日立財団

1. 研究目的

次期学習指導要領では、外国語活動が外国語となり、移行期間中に限り、15時間までなら総合を外国語に使用してよいことになった。前回の改訂においても小学校の総合の時間が105～110時間から70時間に削減された。各教科の授業での言語活動を総合とつなげ、探究的な学びを通してキーコンピテンシーを高めることを期待されていた。しかし、本県の総合の時間では、このような実践が少ないのが現状である。そこで、今回の研究において、キーコンピテンシーを高める単元構想の在り方について明らかにし、本県の教員に広めていく。

1. 1. 研究仮説

児童の資質・能力の育成、発揮につながるトレーニングプログラムを行い、そこで育った資質・能力を応用した探究的な学びを行う。このような単元を実践することでキーコンピテンシーを高めることができると仮定した。

1. 2. 単元構想

全25時間

学校のリーダーに！イノベーターと出会う	1時間
学校改革をするための準備をしよう （児童の資質・能力の育成・発揮につながるトレーニングプログラム）	3時間
学校をより良くするために取り組む課題を考えよう	1時間
課題の解決方法を考えよう	2時間
課題を解決するための準備をしよう	2時間
課題の解決方法を考えよう	1時間
学校改革案のための情報の整理・分析をする	2時間

課題解決にむけての方法や考えをグループで話し合う	2時間
中間発表をして、みんなからアドバイスをもらおう	1時間
学校改革案について話し合い、準備をしよう	3時間
最終発表をしよう	2時間
学校改革案を校長先生に伝えよう	1時間
学校改革を実行しよう	2時間
実行したことの振り返りをしよう	2時間

2. 研究方法

単元の実施前後でクラス全員にアンケートを実施し、その結果を分析することで成果と課題を検証した。事前のアンケートでは以下のような結果だった。

Q1 身の回りをよく観察しているいろんなことに気づくほうだ	とても思う 1 思う 8 思わない 6
Q2 身の回りの問題に気づき、周りの人といっしょに解決できるほうだ	とても思う 0 思う 4 思わない 11
Q3 新しいことを勉強したり、知らないことを初めて見たり、聞いたりするとき、「なぜだろう？」「どうしてそうなるんだろう？」と考えるほうだ	とても思う 5 思う 6 思わない 4
Q4 身の回りに問題を見つけたとき、その解決方法を自分で発想し、それを大切にしよう	とても思う 2 思う 3 思わない 10
Q5 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジ	とても思う 1 思う 7

するとき、「もっと知りたい」と思うことについて人に聞いたり、自分で調べたりするほうだ	思わない 7
Q6 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、自分で目標をたて、目標をたっせいするためにどうしたらいいかを自分で考え、相談するほうだ	とても思う 3 思う 4 思わない 8
Q7 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、失敗しても何度でもやり直したり、よろよいやり方を考えてあきらめないでやろうとするほうだ	とても思う 2 思う 3 思わない 10
Q8 理科の勉強は、毎日の生活や遊び、他の教科の授業などにつながりがたくさんあると思う	とても思う 4 思う 7 思わない 4
Q9 理科の実験や観察の結果など、気づいたことを、図、グラフ、ことばなどでまとめることが得意なほうだ	とても思う 4 思う 2 思わない 9

アンケートの結果、「Q2 身の回りの問題に気づき、周りの人といっしょに解決できるほうだ」についてそう思わないと考えている子どもが多いことが分かった。そこで、キーコンピテンシーの中でも、自律的に行動する能力にあたるこの「Q2」の向上を意識した単元を構想した。

文部科学省では、自律的に行動する能力を以下のよう

自律的に行動する能力

自立とは孤独のことではなく、むしろ周囲の環境や社会的な動き、自らが果たし果たそうとしている役割を認識すること。

・大局的に行動する能力

自らの行動や決定を、自身が置かれている立場、自身の行動の影響等を理解したうえで行える力

・人生設計や個人の計画を作り実行する能力

人生の意義を見失いがちな変化し続ける環境のなかで、自らの人生に一定のストーリーを作るとともに意味や目的を与える力

・権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力
成文のルールを知り、建設的な議論のうえ、調整したり対案を示したりする力

自分自身の権利などを表明するためのみの力ではなく、家庭、社会、職場、取引などで適切な選択をすることができる

3. 授業の実際（単元の実際、活動の実際等）

単元の導入として、問題を発見する、仮説を立てる、計画を立てる、情報を収集する、仮説を確かめる、整理・分析する、創造することを順番に行った。トレーニングのまとめとして、理想の学校について個人で考えた。その後、トレーニングしたスキルを応用して理想の学校へと改革するために探究的活動に取り組んだ。まずは、学校のリーダーとして理想の学校に改革するために、実際により良いものを生み出している日立未来サポーターの話を聞いた。課題設定、情報収集、情報整理分析、企画書作成、中間発表（日立みらいサポーターからのフィードバック）（図1）、企画書再考（図2）、最終発表（日立みらいサポーターへの最終報告）、考えた案の実践という流れで行った。実践では、以下のことを大切にした。目標ルーブリックを拡大して教室に掲示することで、子どもが学ぶ見通しをもつことができるようにした。日立みらいサポーターとの出会いに必然性をもたせた。多くに人と関わっていくことで、学校生活全体での学んでいることを実感できるようにした。自分たちの活動が学校をより良くしていることを実感できるように、多くの先生方に子どもへの声かけをしてもらうようにした。また、調べたり、アンケート・インタビューしたりして分かった事実から自分の考えを導くことを大切にした。上記のことを大切にした上で、子どもが自分の考えを導く中で特に比較・関連・統合することを積み重ねていくことを通して、自律的に行動する能力にあたるこの「Q2」の向上が見られた。また、アンケート結果から、「Q7」が最も向上していることが分かった。

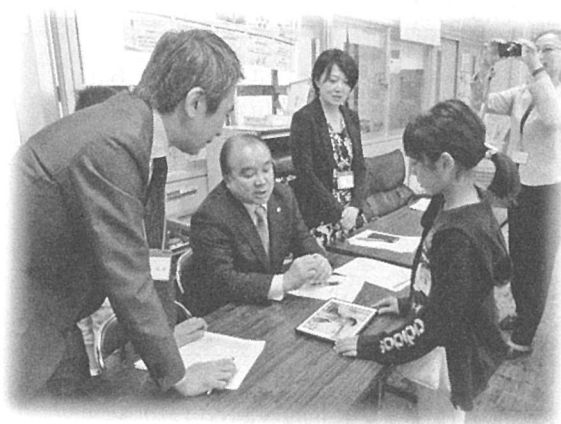


図1 中間発表の様子

事後のアンケートでは以下のような結果だった。

Q1 身の回りをよく観察しているんなことに気づくほうだ	とても思う 1 思う 8 思わない 6
-----------------------------	---------------------------

Q2 身の回りの問題に気づき、周りの人といっしょに解決できるほうだ	とても思う 2 思う 5 思わない 8
Q3 新しいことを勉強したり、知らないことを初めて見たり、聞いたりするとき、「なぜだろう?」「どうしてそうなるんだろう?」と考えるほうだ	とても思う 6 思う 6 思わない 3
Q4 身の回りに問題を見つけたとき、その解決方法を自分で発想し、それを大切にしようだ	とても思う 2 思う 7 思わない 6
Q5 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、「もっと知りたい」と思うことについて人に聞いたり、自分で調べたりするほうだ	とても思う 3 思う 6 思わない 6
Q6 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、自分で目標をたて、目標をたっせいするためにどうしたらいいかを自分で考え、相談するほうだ	とても思う 3 思う 7 思わない 5
Q7 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、失敗しても何度でもやり直したり、よろよいやり方を考えてあきらめないでやろうとするほうだ	とても思う 2 思う 8 思わない 5
Q8 理科の勉強は、毎日の生活や遊び、他の教科の授業などにつながりがたくさんあると思う	とても思う 5 思う 6 思わない 4
Q9 理科の実験や観察の結果など、気づいたことを、図、グラフ、ことばなどでまとめることが得意なほうだ	とても思う 4 思う 2 思わない 9

授業記録（最終発表に向けて画書再考する時間）

ななこ	先生のインタビューから、前回と同じような附属っ子フェスティバルをしても意味がないと思った。
けんじ	それもわかるけど、前回の附属っ子フェスティバルの何が悪いのかを知らない

	いといけない。
ななこ	前回は、授業時間をたくさん使ったのにきちんと勉強になっていなかったり、がんばっている子とがんばっていない子がいたり。そういうところが、悪いって先生たちが言っていた。後、廊下や教室など走ってけがをしたり、お金もかかったみたい。
そう	けがのことは「自分がします宣言」自分たちがルール・マナーを誰よりも守っていくことで学校をよくしていけばいい。
ちか	お金のことは、リユースすれば大丈夫。
れいか	授業時間のことは難しいけど、やっぱり毎日の授業を集中してする。そうじもがんばってやっていく。そうしたら附属っ子フェスティバルでもみんなががんばれるし。それだけ毎日がんばっていたら先生たちも分かってくれると思う。
けんじ	僕は、戸辺さんさんが言っていたように伝統が大切だと思っている。附属小学校の HP をずっと調べていたりして、附属小学校の伝統は、自分たちで自主的にしていくことだと思う。その伝統を大切にしていく。
そう	上手く言えないけど、伝統を引き継ぐだけでなく、伝統を作っていく。復活した附属っ子フェスティバルを伝統にしていきたい。

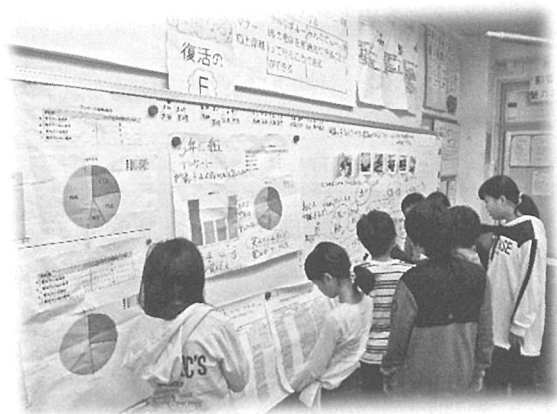


図2 企画書再考

4. 授業の考察

授業での発言の多くが、子どもが自らの調べて分かった事実から自分の考えを伝えている。また、分からなかったことを何度も調べて分かろうとしている。多くの先生方に反対されてる附属っ子フェスティバルを

何とかして復活させたいと考えて学びを進めていることが分かった。

ななこの発言を受けて、問題を解決しようとしてそれが発言をつなげていくところから、「Q2」についての向上が見られる。

けんじは自分の通っている学校の大切にしている伝統とは何かまで考えることができていた。そこから何とか課題を解決しようとしている。そうは最高学年である6年生という立場を考えてどのようにすれば課題を解決できるのかについて考えて行動しようとしてできた。これらは自律的に行動する能力の高まりが分かる。

授業でこのような発言をした背景として、以下の点が挙げられる。

①	児童の資質・能力の育成・発揮につながるトレーニングプログラムを行ったことで、子どもたちの見方・考え方を共有できていた。
②	課題を自分のこととして捉えて、アンケート・インタビューなどの情報収集をし、整理・分析などの経験を繰り返して行った。そのことで、それぞれの児童が事実から考えをもつことができた。
③	子どもたちが考えた学校改革に関する企画案について、中間発表の時に日立みらいサポーターの方々から指摘をしてもらえた。そのことで、必然性をもって、調べ学習にもどることができた。

授業での板書からも、子どもたちが友だちの考えを比較・関連しながら学びを進めたことが分かった。(図3・4) この授業において、見方・考え方を働かせながら話し合いをすることで考えがつながることを実感したと考える。

この授業までに、トレーニングで見方・考え方を共有し、日立みらいサポーターの方々との出会い課題追究の意欲を高めた。自分たちで課題解決のために、情報の整理・分析をし、事実から自分の考えを深めていった。自分たちの考えを伝え合った中間発表では、日立みらいサポーターの方々にアドバイスをしてもらった。そのアドバイスを改善するために、もう一度情報の整理・分析などを行った。そして、最終発表を行った。その最終発表では、日立みらいサポーターの方々に評価してもらい、自分たちも成長を実感していた。単元を通して、何度も学び直しをし、その度に成長を実感していくことで、「Q7」のアンケート結果が向上したと考えられる。

この授業以降、総合の授業だけでなく他教科においても、事実から考えを伝える場面が増えた。

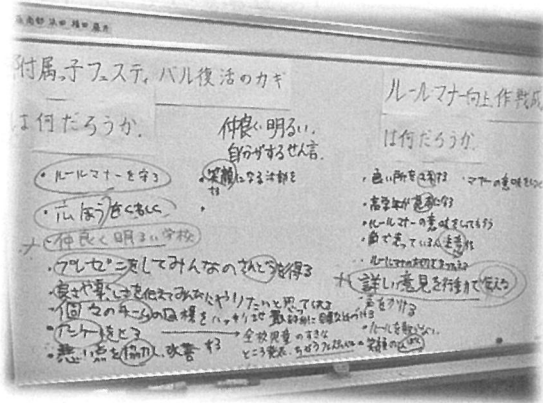


図3 授業記録1

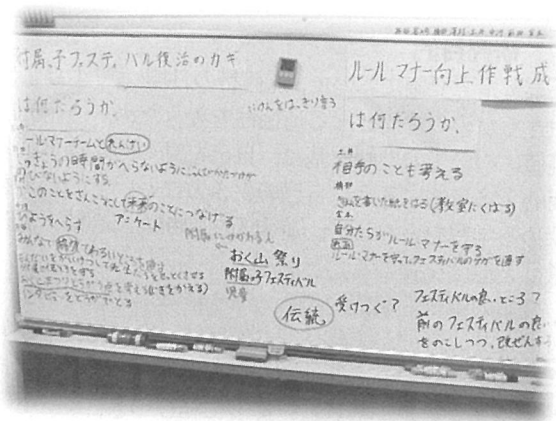


図4 授業記録2

5. 成果と課題

成果

資質・能力の育成・発揮するトレーニングプログラム、それを応用した探究的な学びを通してキーコンピテンシーを高めることができた。実践を終えた後、「友だちと学校改革について考えることで自分の普段の行動を変えることができた。」「学校改革を考えることで、今まで考えなかったことを考えることができたし、高学年として自分ががんばろうと思った。」と感想を書いている子どもがいた。「Q2」と「Q7」においてそう思えると解答した数、授業の発言、そして感想からも自律的に行動する能力が高まったことが分かった。

課題

この単元において、アンケート結果から「Q8」と「Q9」向上していないことが分かった。原因としては本実践においては理科の見方・考え方と関連した授業を実践できなかったことが考えられる。また、今後、多くの学校で総合によってキーコンピテンシーを高める単元を考えていきたい。

参考文献

- 田村 学(2015)「授業を磨く」東洋館出版
 澤井 陽介(2017)「授業の見方」東洋館出版